

# 金剛心の源泉

——親鸞の撰取不捨観——

## 藤 原 智

はじめに

親鸞の語る仏道は、『歎異抄』が、  
たゞ信心を要とすとしるべし。

〔『定親全』四・言行篇1・四頁〕

と端的に述べるように、唯信の仏道と言うべきものである。この信を親鸞自身の言葉で言えば、主著『教行信証』の「後序」に、

愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す。  
〔『定本』三八一頁〕

と記される、二十九歳での師法然との出遇いに獲得された「帰本願」なる自覚である。『歎異抄』は、晩年の親鸞が門弟に語った信念を、

親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられま

ひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。

〔『定親全』四・言行篇1・五頁〕

と記しているが、師法然の教言が親鸞自身の迷い多き生涯を貫いた信念となったのである。そして、ただこの信の獲得によって、生死の迷いを超えるという人生の一大事が果される事を、親鸞は顕揚し続けるのである。

この法然の「ただ念仏」は、法然の主著の題にあるように「選択本願の念仏」と言うべきであるが、この「選択本願」とは、「如来の本願を説きて経の宗致とす」といわれる『大無量寿経』にその淵源をもつものである。そして親鸞は、『教行信証』の開巻第一たる「教卷」に、

夫れ真実の教を顕さば、則ち『大無量寿経』是なり。

〔『定本』九頁〕

という宣言をなすのである。親鸞は、師法然との出遇いの持つ意味を尋ねて、この真実教たる『大経』、つまり釈尊の教言を聞思するのである。何故なら、この信の獲得よって生死の迷いを超えるという事の道理が法として顕かにされないならば、法然との出遇いによる回心がどれほど感動的な出来事であったとしても、それは一個人の過去に起こった一つの特殊な体験であり、気の迷いでしかなかったという事になってしまうからである。そして親鸞は、この獲信の意味を『大経』下巻の本願成就文の上に見出すのである。

其れ衆生有りて、彼の国に生ずれば、皆悉く正定の聚に住す。所以は何んいか。彼の仏国の中には、諸の邪聚及び不定聚無ければなり。十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまう。諸有衆生、其の名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまへり。彼の国に生れんと願せば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と誹謗正法とをば除く。

〔真聖全〕一・二四頁

師法然との出遇いによる信の獲得とは、或る特殊な出来事ではなく、本願の成就として普遍的意味を持つ出来事

だと釈尊によって説かれてある事であった。信の獲得によつて実現する事柄、それは不退転、つまり「正定聚に住するが故に必ず滅度に至る」<sup>②</sup>一道に立ったという事である。ここに親鸞は、「ただ念仏」の教言によつて目覚めた「帰本願」の信をもつて、「証大涅槃の真因」<sup>③</sup>であると顕揚するのである。

さて、『歎異抄』はこの信心発起の相を、端的に次の様に述べる。

弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

〔定親全〕四・言行篇1・三十四頁

「念仏もうさんと思ひ立つ心」として信心は発起する。この信心発起により衆生に獲得される事柄として、『歎異抄』は「撰取不捨の利益」にあずかると述べる。この「撰取不捨の利益」とは如何なる事柄なのか。これを親鸞の著作上に確かめてみると、総じて「撰取不捨の利益」として親鸞は、信については「金剛心」、位は「住正定聚」、証果としては「証大涅槃」を語るのである。そして、これら利益の内容として語られるものは、全て

『大経』の本願成就の内容である。

そもそも「撰取不捨」とは、『観経』真身観に説かれる、光輝く無量寿仏が念仏衆生を照らすはたらきを語る教言である。しかし親鸞は『教行信証』「化身土巻」冒頭で、『観経』真身観に説かれる無量寿仏を化仏であると断定するのである。そして『観経』真身観の教説を方便と位置付けながら、その中「撰取不捨」だけは、例えば『教行信証』「総序」に

撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮すること莫れ。  
(『定本』七頁)

と述べるように、真実教『大経』の教説と一つにして語るのである。<sup>⑦</sup>

法然の教えは、『選択集』三輩章<sup>⑧</sup>に顕著なように、『観経』及び善導の『観経疏』に立って『大経』の教意を探るという方法を取った。そのため法然の下にいた時、親鸞の学びは『観経』中心であったと考えられる。<sup>⑨</sup>その『観経』の救済を象徴的に示すのが、「撰取不捨」の教言である。それ故、法然との出会いによる回心を、親鸞は当初『観経』の文脈における「撰取不捨」の体験と自覚したと考えられる。しかし、その後の『教行信証』において、親鸞は正に『大経』に立った思索を進めていく。

そして前述の通り、『観経』の救済ではなく、『大経』の本願成就として「撰取不捨」を了解するのである。そこには、『観経』の救済として説かれる「撰取不捨」では仏道にならないという、明確な危機感があるのである。

何故なら、『観経』は仏土を外在的なものとして説くため、憧憬の対象には成り得ても自証にはならないからである。どれほどの感動を伴う回心体験があるうとも、やがて過去の体験に成り下がり、虚しさだけが残るのである。親鸞が『大経』の思索において「現生正定聚」と語るのは、信の内景に今この身に生きてはたらく如来を発見したという宣言である。それ故、親鸞が顕かにした浄土真宗という仏道の伝統に立たんとするならば、自己の信心において『大経』の本願成就に立った思索をしなればならないのである。<sup>⑩</sup>

本論は、親鸞が獲信の事実を本願の成就と受け止め、この信に獲得される事柄を「撰取不捨」と語る内実、特にその自覚面を「この信心は、撰取のゆえに金剛心となれり<sup>⑪</sup>」と述べ、「金剛心」として了解していく意味を考察する。そして、この信心の内景の推求により、凡夫の身のままに立ち、歩んでいくことのできる仏道を明らかにせんとするものである。

## 一、金剛心の獲得—本願成就と撰取不捨—

『一念多念文意』において、親鸞は本願成就文を解釈して次の様に述べる。

『無量寿経』の中に、あるいは「諸有衆生、聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心回向、願生彼国、即得往生、住不退転」ときたまえり。(中略)「即得往生」といふは、即は、すなわちといふ、ときをへず日おもへだてぬなり。また、即はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。得は、うべきことをえたりといふ、眞実信心をうれば、すなわち無碍光仏の御こゝろのうち撰取して、すてたまはざるなり。撰はおさめたまふ、取はむかへるとまふすなり。おさめとりたまふとき、すなわち、とき日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり。

(中略筆者『定親全』三・和文篇・二二六—八頁)

このように、親鸞は本願成就に実現される事柄を、撰取不捨として了解するのである。何故親鸞はこの様な了解を示すのか。この親鸞の思索を『教行信証』「信卷」中に尋ねたい。

「信卷」は、この本願文・本願成就文を初めに掲げ論述が進められる。そしてこの信心獲得の内実を端的に顕したのが、続けて引用される『浄土論註』下巻の讚嘆門積である。『論註』は、念仏を一心帰命の信より出た大いなる讚嘆であると註釈する。要点だけを述べると、

称彼如来名とは、謂く無碍光如来の名を称するなり。

(『定本』九九頁)

と、讚嘆とはまず無碍光如来(＝阿弥陀)の名を称える称名念仏であると押さえられる。そして、仏が光をもって讚嘆される事について、さらに次の様な註釈がされる。

如彼如来光明智相は、仏の光明は是智慧の相なり。

此の光明、十方世界を照らすに障碍あることなし。

能く十方衆生の無明の黒闇を除く。日月珠光の但室穴の中の闇を破するが如きには非ざるなり。

(『定本』九九—一〇〇頁)

その讚嘆される光明とは、衆生の抱える無明という迷いの闇を照らしたす仏の智慧のはたらきなのであり、我々が普段目に見る光を語っているのではない事が述べられる。それ故、次に、

如彼名義欲如实修行相應は、彼の無碍光如来の名号、能く衆生の一切の無明を破す、能く衆生の一切の志

願を満てたまふ。〔定本〕一〇〇頁

と、称名という「念仏もうさんとおもいたつこころ」の起こつた回心とは、仏の智慧の光明に、自己の内奥に潜む無明の闇が照らされ摧破され、自己の一切の志願が満足された体験であることが述べられるのである。そして、この破闇満願という光照を蒙つた自覚は、無明を抱えて生きる自己が無批判にも立てていた信というものを「不淳・不一・不相統」と明らかにする。そこに、

此れと相違せるを如実修行相応と名づく。是の故に論主建めに我一心と言えり、と。已上 (同前)

と述べられ、自己全体をその根源から批判し尽くす絶対的な信として、論主天親の「我一心」が顕揚される。そして、それこそ「聞其名号信心歓喜乃至一念」という本願成就の相に他ならないことが確かめられるのである。親鸞は、この本願成就の一心に立ち、この獲信の内実を本願そのものに尋ねる思索を展開する。それが「信巻」の三心一心問答である。

「信巻」冒頭に、

至心信樂の本願の文、『大経』に言はく、設い我仏を得たらむに、十方の衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲ふて乃至十念せむ。若し生まれざ

れば正覚を取らじと。唯五逆と誹謗正法を除く、と。

已上 〔定本〕九七頁

と示されるように、如来は愚悪の衆生のために「至心・信樂・欲生」の三心を誓われた。しかしその本願は、現実は天親の表白の如く「一心」として成就する。では、その三心の願を発す仏意はどこにあるのか。それを推求することにより、信心獲得の内実を探るのが三心一心問答である。この問答を通して、親鸞は自身に発起せる信心こそ大般涅槃無上の大道を開く金剛心であると、その実質を尋ね当てるのである。<sup>12)</sup>

三一問答は、まず三心の第一である「至心」についての推求に始まる。それは「ただ念仏」の教えに帰した時、まず初めに感得された事実の推求である。つまり、『論註』が破闇満願と説いた光明体験の意味は何か、という事である。これについて、まず、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。是を以て如来、一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまふ(以下略) 〔定本〕一一六―七頁

と述べる。そこには徹底して「穢悪汚染」「虚仮諂偽」

と自己を見抜き照らし出す、如来の眞実智慧が述べられる。さらにその眞実智慧が、法蔵の願行という力動性として衆生に現れ出るのだと述べられる。このように、親鸞は回心における光明体験の意味を、『大経』上巻の勝行段に説く法蔵菩薩の兆載永劫の修行に見出したのである。そしてこの事実を、「至徳の尊号をその体」とする如来の眞実功德の回施であると了解したのである。この事を『唯信鈔文意』では、「尊号」の解釈として、

この如来の尊号は不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御なり。

〔『定親全』三・和文篇・一五六頁〕

と述べる。親鸞は回心において感得した事を、法蔵の願行の成就した眞実功德の回施であり、衆生を大般涅槃に至らせる如来の力動性であると自覚化し、これを至心の上に見たのである。

この至心の推求は、「利他回向の至心を以て信樂の体とする」と述べるように、ただちに次の信樂釈へと展開する。つまり「信樂」とは、如来の清淨眞実なる智慧が、この念仏する身に生きてはたらいっている自覚である。それが、

信樂と言うは、則ち是如来の満足大悲・円融無碍の信心海なり。

〔『定本』一一〇頁〕

と述べられるように、如来と我が円融無碍に一つであり、絶対の満足だという信である。

信樂釈では、衆生はどこまでも流転の身であり、「法爾として眞実の信樂なし」と、道理として自身に信心が成立しないのだという懺悔が述べられる。これが続けて、一切凡小、一切時の中に、貪愛の心常に能く善心を汚し、瞋憎の心常に能く法財を焼く。

〔『定本』一一二頁〕

と、この身は常に貪瞋煩惱に狂わされ続けるのであり、その身に行う一切の善は虚仮雑毒でしかないと述べられる。そして、

此の虚仮雑毒の善を以て、無量光明土に生まれんと欲する、此必ず不可なり。

〔同前〕

と、それをもって無量光明土である浄土に欲生するのは必ず不可であると、徹底した身の懺悔のみが語られ続けるのである。信樂とは、このような徹底した懺悔としてのみあるのである。しかしこの懺悔は、「至心」に見た如来の眞実なる智慧によって照らされた自覚であるからこそ、

斯の心は即ち如来の大悲心なるが故に、必ず報土の  
正定の因と成る。  
(同前)

と述べられ、仏の大悲心そのものとされる。そしてそれ故、報土である無量光明土という仏の智慧の光明の境界が開示され、この信心を因として現生に正定聚に入ることになるのである。こうして、至心信樂に確かめられた事実が、

本願信心の願成就の文、『経』に言はく、諸有の衆生、其の名号を聞きて信心歡喜せむこと乃至一念せむ、と。已上  
(同前)

という、本願成就文前半の語る「聞其名号」を契機とした信心獲得の内実だとされるのである。さらに、この信心こそ無上涅槃の因であるとして、『涅槃経』『華嚴経』が引用され「信は道の元とす、功德の母なり」「涅槃無上道を開示せしむ」<sup>⑯</sup>等と確かめられるのである。特に、『華嚴経』引用の最後の二つの事柄に信心の積極性がよく表されている。すなわち「能く一切衆を兼利せん」及び「生死に処して疲厭なけん」<sup>⑰</sup>である。この生死の迷いの只中に満足して身を置き続け、一切衆生と共に救われていく歩みを開示する、それが本願の成就であり、天親の彰した一心である。

「ただ念仏」の教えによる獲信の体験は、『論註』の語る破闇満願であり、これこそ撰取の体験に他ならない。そしてこの体験の意味を本願に尋ねた時、それは如来の真実功德の回施の体験であり、そのままこの身に於ける自力無効の懺悔として自覚化される。この懺悔に自己から目覚める事はあり得ず、それは我が身における如来の大悲心の顕現に他ならない。そして、この大悲心こそ浄土を建立せる因であり、そのため自力無効の懺悔に無量光明土たる浄土が開かれるのである。ここに、満足しながら生死の迷いの世界に立つて歩む意欲が湧き上がる。しかし、それは決して「此必不可也」とされる迷いの意欲ではない。では、この獲信に起こる意欲は一体何であるのか。その根源を本願に尋ね当てたのが、次の「欲生」の願心の推求である。

「欲生」について、親鸞は直ちに次の様に規定する。  
次に欲生と言うは、則ち是れ如来、諸有の群生を招喚したまふの勅命なり。  
(『定本』一二七頁)

このように親鸞は、欲生を如来による迷いの衆生に對しての真実なる世界に「生まれんと欲え」<sup>⑱</sup>という絶対的な呼びかけであるとする。先に信樂について、如来の大悲心そのものであると推求された。その大悲とは、真実

に昏く自我を主張し外に眼を向け現実の凡夫の身から乖離していく衆生のあり方を大悲しているのであり、それ故に凡夫の身こそ真実であると衆生を呼び戻すという力動性を持つ。親鸞は、このような如来の力動性を、「生まれんと欲え」という招喚の勅命として「欲生」の願心に聞きとめたのである。つまり「ただ念仏」の教えに、自身を凡夫であると思いたくない自己が、この身は凡夫であったと懺悔し、これこそ真実であるとの満足を得る。この時、この獲信の根源に、真実を衆生に開示せんと兆載永劫の修行を続け、衆生の虚妄と格闘し続ける法蔵菩薩の御苦勞と、これを支える意欲（大菩提心）を感得するのである。それは、これまで救いを求めずにはおれなかった自らの求道に、常に「凡夫の身に帰れ」と呼びかけ続ける法蔵の意欲がはたらいっていたという信知となり、この法蔵の意欲こそ我が真実なる意欲だとして、喜んでこの意欲に順じんと志願を持つことになるのである。それ故、この「諸有の群生を招喚したまうの勅命」なる欲生こそ、仏道に立つ根柢を一切持たない自己の上に涅槃無上道を開示させる根源意欲なのであり、「能く一切衆を兼利せん」及び「生死に処して疲厭なけん」という信の意欲となるのである。この事態を親鸞は、

是を以て本願の欲生心成就の文、『経』に言はく、  
至心回向したまへり。彼の国に生まれんと願すれば、  
即ち往生を得、不退転に住せむと。唯五逆と誹謗正  
法とを除く、と。已上　　（『定本』一三八頁）  
と本願成就文後半に見出だし、欲生心が成就した姿だと  
して引用する。それは、「至心回向したまへり」という  
本願の名号の回施<sup>19</sup>により獲得せる一心帰命の信が、「如  
来の勅命にしたがうこころ」と自覚化され、止む事なき  
本願の意欲を願生浄土の志願として生きる者へと転ぜら  
れる事態となるのである。これが「即得往生住不退転」  
である。

この事実を教示する言葉として、親鸞はさらに善導の  
『観経疏』回向発願心積を引用する。

光明寺の和尚の云わく、また回向発願して生まるる  
者は、必ず決定真実心の中に回向したまへる願を須  
めて、得生の想を作す。此の心深く信ぜること、金  
剛のごとくなるに由つて、一切の異見異学別解別行  
の人等のために動乱破壊せられず。

（『定本』一三〇頁）

ここに「回向したまえる願を須いて」と読まれ、本願の  
欲生心成就文と重ねて引用されるのであるが、この引文

で確かめられているのは信が金剛心となる事である。つまり、欲生の推求を通して初めてこの信心が金剛心であると語られ得るのである。それは獲信の因位に止むことなき法蔵の願心を得得するからであり、この事を親鸞は、

本願力回向の大信心海なるが故に破壊すべからず。

これを金剛の如しと喩うるなり。〔定本〕一三二頁

と述べるのである。そして、この欲生の推求を通して確かめられる金剛心によって、回心という一過性の体験を突破し、住正定聚・必至滅度の実質を持った仏道の歩みが始まるのである。そこで次からは、この金剛心に開かれる自覚道を考察していきたい。

## 二、金剛心の自覚内容―現生護念増上縁―

先に『一念多念文意』が本願成就の内容を「撰取」で確かめていることを述べた。『一念多念文意』は続けて「即得往生住不退転」の内容を必至滅度の願で確かめ、その後さらに善導「観念法門」と源信『往生要集』の「撰取不捨」を解釈する文言が引用される。

また現生護念の利益をおしへたまふには、「但有専念、阿弥陀仏衆生、彼仏心光、常照是人、撰護不捨、総不論照撰、余雜業行者、此亦是、現生護念、増上

縁」とのたまへり。(中略)首楞嚴院の源信和尚のたまはく、「我亦在彼、撰取之中、煩惱障眼、雖不見、大悲無倦、常照我身」と。(以下略)

(中略筆者『定親全』三・和文篇・一三三―一六頁)

この善導と源信の文こそ、「撰取不捨の利益」を示すものである。撰取不捨は、「念仏もうさんとおもいたところのおこるとき」に於ける体験的な一過性の事柄ではない。善導が「彼仏心光常照是人撰護不捨(現生護念増上縁)」と述べ、源信が「大悲無倦常照我身」と述べるように、常に照らすという現生護念の利益として相統されると親鸞は確認している。そして、この常に照らすという現生護念こそ現生正定聚の根拠であり、金剛心に感得される事柄である。

この常に照らされ護られるとは如何なる自覚内容となるのか。先掲の「現生護念増上縁」を用いた「正信偈」の次の一節を見てみたい。

撰取心光常照護 已能雖破無明闇  
貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天  
譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇

〔定本〕八六一―七頁

撰取の光明に照らされるとは、第一に無明の闇が破られ

るといふ体験である。これこそ回心の感動であり、本願成就文に「信心歓喜」と説かれる事柄である。ただそこで見えてくるものは、信樂釈に述べられたように常に貪瞋煩惱で眞実信心を覆い続ける自己である。それは、無明の闇を作っていたのは自己であったという信知であり、懺悔となる。しかし、この常に眞実信心を覆う煩惱を通して常に照らす仏の光明を見るのであり、ここにおいて煩惱こそ仏の智慧の象徴となる。「常照護」たる仏智と「常覆」たる煩惱が一つの事柄なのである。そうであれば、あるのは臨終の一念まで常に煩惱具足の自己の発見のみである。これが、眞実智慧たる光明に常に照らされる自覚であり、煩惱の身は何も変わらないままにわれらの生が明るさとなるのである。<sup>23)</sup>

では、何故この「常」なる自覚が衆生に実現するのだろうか。これを示すのが「唯除五逆誹謗正法」である。

この「唯除」の教言は、因願文と欲生心成就文に説かれているものである。「常照護」たる果成の光明は、その因位に法蔵の願心を持つ。法蔵の願心は、一切衆生を「欲生我國」と招喚し「若不生者不取正覺」と誓いながら、「唯除五逆誹謗正法」との自己矛盾を叫ばずにはおれない大悲の心であった。そして因位の「唯除」の叫び

は、果においても変わらず「唯除」と叫び続ける。この「唯除」の叫びが、衆生を回心の一体験に安住させず、「つみのおもきことをしめして」<sup>24)</sup>どこまでも「常没常流転」であり「無有出離之縁」であると、機の深信を促して止まない能動的意欲として常に迫ってくるのである。

この「唯除」され続ける、どこまでも罪業の身であるという信知において、「常照護」たる果成の光明を見るのである。因も果も貫く「唯除」の叫びが衆生の歩みを促し続ける所に、現に「常照護」なる仏智のはたらきがあるのであり、この事実を親鸞は「この信心は、撰取のゆえに金剛心となれり」と語ったのである。

この事を、また別の角度から考えたい。つまり、「常照護」とは一体何から護ると親鸞は了解していたのかという事である。それは、金剛心を語る欲生釈所引の善導の引文に、

此の心深く信ぜること、金剛のごとくなるに由つて、一切の異見異学別解別行の人等のために動乱破壊せられず。

と示されていた。信仰の歩みにおいて問題となるのは、「異見・異学・別解・別行」によって「動乱破壊」される事である。それは、『一念多念文意』における現生護

念増上縁の「撰護不捨」の解釈を見ても、

「撰護不捨」とまふすは、撰はおさめとるといふ、護はところをへだてず、ときをわかず、ひとをきらわず、信心ある人おぼひまなくまもりたまふとなり。まもるといふは、異学・異見のともがらにやぶられず、別解・別行のものにさえられず、天魔波旬におかされず、悪鬼・悪神なやますことなしとなり。不捨といふは、信心のひとを、智慧光仏の御こゝろにおさめまもりて、心光のうちにときとしてすてたまはずと、しらしめむとまふす御のりなり。

〔定親全〕三・和文篇・二三四―三五頁

と述べられ、「異見・異学・別解・別行」を問題として「護」という事が語られている事が確認できる。

では「動乱破壊」する存在、「異見・異学・別解・別行」とは何か。これは善導『二河譬』において群賊悪獣として譬えられるものであるが、親鸞は『愚禿鈔』で群賊悪獣について、

「群賊悪獣」は 群賊は 別解 別行 異見 異執  
悪見 邪心 定散自力の心なり

〔定親全〕二・漢文篇・四四頁

と述べるのである。「異見・異学・別解・別行」とは自

己の外側の存在に見えるが、親鸞はこれら「動乱破壊」する存在を単に他者とし<sup>28</sup>ない。ここで「悪見・邪心・定散自力の心」を付け加えて述べるのは、「動乱破壊」する存在が自己の内面であると示すものである。親鸞は「信巻」別序において、「末代の道俗・近世の宗師」に對し、

定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し。

〔定本〕九五頁

と厳しく批判し、また『一念多念文意』において、一念多念の争いという問題の根源を次の様に指摘するのである。

一念多念のあらそひをなすひとおぼ、異学・別解のひととまふすなり。異学といふは、聖道・外道におもむきて、余行を修し、余仏を念ず、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり、これは外道なり、これらはひとへに自力をたのむものなり。別解は、念仏をしながら、他力をたのまぬなり。別といふは、ひとつなることを、ふたつにわかちなすことばなり、解はさるといふ、とくといふことばなり、念仏をしながら自力にさとりなすなり。かるがゆへに、別解といふなり。また助業をこのむもの、これすなわ

自力をばげむひとなり。自力といふは、わがみをしたのみ、わがこゝろをたのみ、わがちからをばげみ、わがさまざまな善根をたのみひとなり。

〔定親全〕三・和文篇・一四一—二頁

親鸞は信仰上の問題を、自らの内面に潜む定善散善に代表される善をたのみ意識、つまり「自力の心」に集約するのである。この善をたのみ意識こそ、現実の凡夫の身を忘却せしめ仏道を障碍する群賊悪獣なのであった。

「摂取心光常照護」という仏の摂取の用が「常に照らし護る」というのは、自己の内面に潜む「自力の心」から行者を護るのである。この摂取の光明は、偏に「唯除」と誓わねばならない大悲による機の深信の徹底と相続の促しに全面的に帰し、凡夫の身こそ我が身の真実であると領いた所の明るさである。つまり、「罪悪生死の凡夫」という懺悔こそ、「わがみをたのみ」と述べられる「自力の心」を捨てしめるのである。常に「唯除」と叫び、徹底的に罪業の身である事を知らしめんとする法蔵の願心により、念念に凡夫の身に帰り続けるのであり、この機の深信の徹底と相続こそ定散自力の心に動乱破壊されざる金剛心として語られるのである。

では、この欲生心の成就として獲得される金剛心が衆

生に如何なる仏道を開くのか、次に「信巻」の展開を追って確認していきたい。

### 三、金剛心の行人―教化の志願―

「信巻」の三一問答の終わりに、現生十種の益が説かれる。それは、法蔵の意欲が衆生の自覚にもたらす内容を、金剛心の獲得によって獲得の利益として示すものである。<sup>28)</sup>

金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超へ、必ず現生に十種の益を獲。何者か十とする。一には冥衆護持の益、二には至徳具足の益、三には転悪成善の益、四には諸仏護念の益、五には諸仏称讚の益、六には心光常護の益、七には心多歡喜の益、八には知恩報徳の益、九には常行大悲の益、十には正定聚に入る益なり。

〔定本〕一三八—一九頁

この中で、特に後半の五つが仏道の歩みを示すものと考えられる。その後半の五つの利益は、まず「心光常護」という光明の摂取のはたらきに始まり、これが次に「心多歡喜」と展開し、回心における破闇満願の歡喜となる。それに続けて「知恩報徳」と、如来の大悲恩徳を知りそ

の恩徳に順じ報いんとする意欲が語られる。そしてさらに「常行大悲」が語られるが、これこそ「あい勧めて念仏を行ぜしむる」<sup>28)</sup>という教化の実践である。十方衆生に「我が国に生まれんと欲え」と呼びかける本願に呼び覚まされ、これを恩徳と知り、この意欲に順じ生きんとする志願、これが「常行大悲」という教化へと人を歩ませるのである。これらを全て凝集させた形で、最後に「入正定聚」が語られるのである。

この金剛心を獲得し正定聚に入る者について、次の自釈から始まる「信卷」後半の真仏弟子釈で親鸞は確かめている。

真仏弟子と言は、真の言は偽に對し仮に對するなり、弟子は釈迦諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり、この信行に由つて、必ず大涅槃を超証すべきが故に真仏弟子と曰ふ。  
〔定本〕一四四頁

釈迦諸仏の「ただ念仏」の教言を聞き信心獲得せる者、これを「金剛心の行人」として親鸞は論述していく。その初めに、『大經』の第三三触光柔軟の願・第三四聞名得忍の願を連引する。この二願に、本願が実現する人間像を聞いているのである。

『大本』に言はく、設い我仏を得たらむに、十方無

量不可思議の諸仏世界の衆生の類、我が光明を蒙りてその身に触るる者、身心柔軟にして人天に超過せむ。もし爾らずは、正覚を取らじ、と。

設い我仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、我が名字を聞きて、菩薩の無生法忍・諸の深総持を得ずは、正覚を取らじ、と。已上

(改行筆者・同前)

この二願は、共にその対象を「諸仏世界の衆生」と語る。それは、諸仏の阿弥陀を讃嘆する声を聞いた衆生、つまり本願成就せる人である。その触光柔軟の願では、衆生が弥陀の光明を蒙る事によつて身も心も柔軟、もしくは安樂<sup>29)</sup>なる事が誓われている。これは摂取不捨の事実を示すものである。さらに聞名得忍の願では、聞名が決定的な契機となり、菩薩の無生法忍を得ることが誓われている。この光明と名号による摂化は、正に回心における破闇満願の事実を誓われたに他ならない。そして、この回心によつて願生浄土の志願を生きる者となるのだが、親鸞はさらに『大經』下巻の三毒段の終わりにある次の一文を意味深く引用している。

また言はく、それ至心ありて安樂國に生まれんと願ずれば、智慧明らか達し、功德殊勝を得べし、と。

願生の志願に生きる者、それは世間の只中で明らかなる智慧と殊勝なる功德を得るというのである。この智慧とは何度も繰り返し返したように、光明として自己を照らす本願の智慧であり、「煩惱具足の凡夫」と自己の実相を見抜く智慧である。そして、この智慧の獲得者が「金剛心の行人」たる真仏弟子である。

さて、その「金剛心」とは、欲生釈で確かめられたように善導の言葉である。そこで今、真仏弟子釈での善導の引文からこの金剛心の行人について確認していきたい。

光明師の云く、(般舟讚)ただ恨むらくは衆生の疑ふまじきを疑ふことを。浄土対面してあい忤はず、弥陀の撰と不撰を論ずること莫れ。意専心にして回すと回せざるとにあり。乃至 或は道はく、今より仏果に至るまで、長劫に仏を讚めて慈恩を報ぜむと。弥陀の弘誓の力を蒙らずは、いづれの時のいづれの劫にか娑婆を出でむ、と。乃至 いかんが今日宝国に至ることを期せむ。実に是れ娑婆本師の力なり。もし本師知識の勸に非ずは、弥陀の浄土、云何してか入らむ、と。

また云く、(往生礼讚) 仏世甚だ値ひ難し、人信慧あ

ること難し。偶たま希有の法を聞くこと、これまた最も難しとす。自ら信じ人を教へて信ぜしむ、難きが中に転た更難し。大悲、弘く普く化する、真に仏恩を報ずるに成る、と。

(括弧内筆者、『定本』一四七―一八頁)

まず初めに『般舟讚』と『往生礼讚』が連引される。この二文は「化身土巻」にもほぼ同様の連引があり、親鸞がこの二文を一つの文章として見ている事がわかる。その『般舟讚』から、第一に衆生の疑が問題とされ、「意専心にして回すと回せざるとにあり」と、われらの仏道はまず回心の一点に係っているのであり、この回心を抜きに弥陀の撰取を論じるべきでないことが語られる。そしてこの回心において、「弥陀の弘誓の力」「本師知識の勸」という本願と善知識の恩徳を信知するのであり、「長劫に仏を讚めて慈恩を報ぜん」とする志願を持つのだという事が語られるのである。

続く『往生礼讚』からは、まず「値ひ難し」「信じ難し」「聞き難し」と語られる。この文を引く親鸞は「総序」で、「遇い難くして今遇うことを得たり。聞き難して已に聞くことを得たり。」と表白する親鸞である。仏教との値遇の感動の中で自覚される事、それは徹底的に

自己の中に仏教と遇うべき因を全く持たないという自力

無効の懺悔のみであり、これこそ自身の分限である。しかしこの自覚には、「生まれんと欲え」と諸有の群生を招喚する法蔵願心がその根源にあるのであり、この法蔵の意欲を我が真実なる意欲として生きんという志願が必ずや湧き上がる。これが「知恩報徳」として自覚化され、人を教化の志願に立ち上がらせるのである。その「神力を乞加す」と本願を仰いで為される報恩が、「自信教人信」と語られるのである。そして「大悲、弘く普く化する」と引用し、教化の結実は本願そのものの弘がりであり普遍性であると、どこまでも仏道の全てを本願に返し、自身は「親鸞は弟子一人もたずさふらう」との分限を守りつつ、常行大悲の教化の志願に身を粉にしていく。それが金剛心の行人の姿であると『往生礼讚』を引用するのである。そしてさらに『往生礼讚』からもう一文引用される。

また云く、弥陀の身色は金山の如し。相好の光明は十方を照らす。唯念仏するありて、光摂を蒙る。当に知るべし、本願最も強しとす。十方の如来舌を舒べて証したまふ。専ら名号を称して西方に至る。彼の華台に到りて妙法を聞く。十地の願行自然に彰る、

と。 (『定本』一四八頁)

この引文は、『往生礼讚』原文では『観経』真身観についての讚であり、「撰取不捨」を語る讚である。この讚は、撰取を「当知本願最為強」と本願のはたらきだと明確に述べる<sup>36)</sup>。つまり、本願の成就として、先の二文で確かめた仏道に衆生は立つ。その「ただ念仏」の歩みに撰取の光明を仰ぎ見るのである。そしてこの本願の撰取を蒙るところに、「十地の願行自然に彰る」と語られる、住正定聚・必至滅度なる涅槃無上道の実現がある。この、衆生を現生に正定聚に住せしめる本願の撰取について、最も具体的に教示するのが、次に引用される『観念法門』「現生護念増上縁」である。

また云く、ただ阿弥陀仏を専念する衆生ありて、彼の仏心の光、常に是の人を照らして撰護して捨てたまはず。総て余の雑業の行者を照らし撰むと論ぜず。此れまた是れ現生護念増上縁なり、と。已上

(同前)

この引文をもって、真仏弟子釈での善導の引用上初めて「已上」の語が置かれ、一つの区切りとされる。それは、金剛心の行人の歩み全体を撰取不捨の利益「現生護念増上縁」で押さえるという事であり、親鸞は自身に実現せ

る仏道全体を「常照護」なる本願の摂取の力用に仰ぐのである。<sup>⑦</sup>

この摂取の光明に照らされた自覚を最も明確に語るのが、「真仏土巻」所引の『讚阿弥陀仏偈』における曇鸞の表白であろう。

我無始より三界に徧りて虚妄輪のために回轉せらる。一念一時に造る所の業足、六道に繋かれ、三途に滞る。唯、願わくは慈光我を護念して、我をして菩提心を失せざらしめたまへ。我、仏恵功德の音を讚ず。願わくは十方の諸の有縁に聞かして、安樂に往生を得むと欲はむ者、普く皆意の如くして障礙なからしめむ。あらゆる功德もして大小、一切に回施して、共に往生せしめむ。不可思議光に南無し、一心に帰命し稽首し礼したてまつる。

〔定本〕二五六―七頁

ここに曇鸞は、自らの業により迷いの三界に居る虚妄の自己を懺悔し、自己を護念せる慈光を讚嘆しながら、「願わくは十方の諸の有縁に聞かして」「共に往生せしめん」という菩提心に生きんとする志願を語るのである。その全体が、「南無不可思議光」という「ただ念仏」の教えに開かれた、一心帰命の信の内実なのである。もし

て親鸞は、この南無の当体であり、本願の成就として自己の内から無明の闇を摧破して現れ出た「不可思議光」をもつて、「真仏土巻」冒頭に、

謹んで真仏土を案ずれば、仏は則ち是れ不可思議光如来なり、土はまた是れ無量光明土なり。

〔定本〕二二七頁

と述べ、これこそ真仏であるとし、『観経』真身觀の教説と区別したのである。

回心とはまさに「摂取不捨」と語られるべき、光明体験を伴うものである。しかしこの意味を『観経』の教説の如く、外在する阿弥陀が外から念仏衆生を照らすと了解する時、善導の『観経疏』の三縁釈<sup>⑧</sup>の説明がなされようとも、その体験の因果の必然性は外在の阿弥陀に委ねられるのであり、それ故に衆生からすると偶然の出来事となってしまう。そしてこの体験が過去のものとなった時には、過去を追憶し「今の自分は信心が足りない、念仏が足りない」と自力を励まざるを得なくなるのである、それこそ一念多念の争いに代表されるような仏道からの退転を現すことになるのである。これが、外在的に仏を説く『観経』の限界である。<sup>⑨</sup>

親鸞は、回心における摂取の体験を、『大経』に還元

し、本願成就の体験であったと自覚化する。そして、成就として獲得された自己の信心の内に向かって、獲信の意味を因である本願そのものに問うという思索をしたのである。これこそ「信巻」に展開される三一問答であった。そこで親鸞が見出したものが、自己の根源において兆載永劫に衆生の虚妄と格闘し続ける法蔵菩薩であり、この法蔵こそ仏道の因であると領いたのである。この思索により、仏道の因果が全て自己一人の内に確かめられたのであり、独立者の誕生があるのである。そして、この法蔵の願心はどこまでも「唯除」と叫び続け、人を果ではなく因に立たしめ続ける。ここに体験の一過性を突破し、法蔵願心を願生浄土の志願として生きていく歩みを実現するのである。この法蔵の意欲が、いま現に自己の無明の闇を破って自己の根源から湧き上がる所に、仏の智慧の光明の耀きはあるのである。そして親鸞は、この本願成就の事実以外の、『観経』真身觀の教説に代表される仏は、全て化仏であると断定したのであった。

### おわりに

「信巻」真仏弟子釈の結びに、次の親鸞の悲嘆述懐が述べられる。

誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ること  
を喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざること  
を、恥ずべし、傷むべし、と。 (『定本』一五三頁)

ここに述べられた懺悔の自覚こそ、正に如来の大悲への  
信知であり、金剛心の行人の立脚地なのであった。そしてこの自身の懺悔は、ただちに一切衆生への歎異となり、同時に願生浄土の自覚道として、「共に往生せしめん」という教化の志願に身を尽す者へと転ぜられるのである。この願生の志願はその内面に法蔵の願心を感じせるものであり、その法蔵の願心は浄土の功德を成就するものである。そうであれば、願生浄土の志願とはその身に浄土の功德を自証する歩みとなるのである。そのことを示すが如く、「証巻」には『論』・『論註』から五つの浄土の功德が引用される。特にその中の主功德にこそ、願生の積極性が示されるのではないだろうか。

莊嚴主功德成就は、偈に正覚阿弥陀法王善住持の故  
にと言へり。(中略)もし人・一たび安楽浄土に生  
ずれば、後の時に意三界に生まれて衆生を教化せむ  
と願じて、浄土の命を捨てて願に随いて生を得て、  
三界雜生の火の中に生まると雖も、無上菩提の種子

畢竟して朽ちず。何を以ての故に。正覚阿弥陀の善く住持を徑るを以ての故にと。

(中略筆者『定本』一九七―八頁)

ここに、浄土に生ぜる者、つまり「即得往生住不退転」と語られる本願成就の身に、この迷いの三界の中において教化の志願に身を尽そうとする菩提心が発起し、朽ちないことが語られるのである。そして、それは阿弥陀の善住持によるのである。この「善住持」こそ、本論で確かめてきた「撰取心光常照護」なのであり、ここに「この信心は、撰取のゆえに金剛心となれり」といわれる金剛心の行人の歩みがあるのである。そしてこの歩みは、偏に「生まれんと欲え」と諸有の群生を呼び続ける法蔵の願心を源泉とした歩みなのであった。

この回心に始まる願生浄土の歩みこそ、『唯信鈔文意』において

回心といふは自力の心をひるがへしつづるをいふなり(中略)自力のこゝろをすつといふは、やうやうさまざまの大小聖人善悪凡夫の、みづからがみをよしとおもふこゝろをすて、みをたのまず、あしきこゝろをかへりみず、ひとすちに具縛の凡愚屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号

を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。

(中略筆者『定親全』三・和文篇・一六七―八頁)

と述べられる、凡夫の身に実現する涅槃無上道なのであり、親鸞の開顕せんとした浄土真宗の積極性なのである。本論は、主に信そのものについての論述に終始してしまい、獲信の決定的な縁となる諸仏善知識についての言及はほぼできなかつた。この諸仏善知識は、「化身土卷」の第二十願の推求において、愈々語られていく事柄である。そしてその第二十願の問題は、本論の中心課題である金剛心と非常に密接な、表裏の關係と言うべき事柄である。この事については別稿にて論じたい。

### 凡例

- ・ 漢文は読みやすさを考慮し書き下し文にした。
  - ・ また、旧漢字は可能な限り現行字体に改めた。
  - ・ その際、『真宗聖典』(東本願寺出版部)を参考にした。
  - ・ 主な出典は次の様に略記した。
- 『定本教行信証』……『定本』  
『定本親鸞聖人全集』……『定親全』  
『真宗聖教全集』……『真聖全』

註

- ① 『教卷』・『定本』九頁  
 ② 『証卷』・『定本』一九五頁  
 ③ 『信卷』・『定本』九六頁  
 ④ 『正像末和讃』

弥陀智願の回向の 信樂まことにうるひとは  
 撰取不捨の利益ゆへ 等正覚にはいたるなり

〔定親全〕二・和讃篇・一四八頁

弥陀の本願信すべし 本願信するひとはみな  
 撰取不捨の利益にて 無上覚おぼさるとな

〔定親全〕二・和讃篇・一五二頁

『末燈鈔』(第三通・第七通)

信心をえたるひとは、かならず正定聚のくらゐに住するがゆへに等正覚のくらゐとまふすなり。『大無量寿經』には、撰取不捨の利益にさだまるものを正定聚となづけ、『無量寿如来会』には等正覚とときたまへり。

〔定親全〕三・書簡篇・六八―九頁

如来の誓願を信する心のさだまるとまふすは、撰取不捨の利益にあづかるゆへに、不退のくらゐにさだまると御こゝろえさふらふべし。眞実信心のさだまるとまふすも、金剛の信心のさだまるとまふすも、撰取不捨のゆへにまふすなり。されはこそ無上覚にいたるべき心のおこるとまふすなり。これを不退のくらゐともまふし正定聚のくらゐにいとまふし、等正覚にいたるとまふすなり。

〔同前・七七―八頁〕

また、これらと同様の意として『唯信鈔文意』には、

一行一心なるひとを撰取してすてたまはざれば弥陀となづけたてまつると、光明寺の和尚はのたまへり、この一心は横超の信心なり。(中略)この信心は撰取のゆへに金剛心となれり。これは『大経』の本願の三信心なり。この眞実信心を世親菩薩は、「願作仏心」とのたまへり。

(中略筆者『定親全』三・和文篇・一七四頁)

と述べられるなど、親鸞著作上に数多くの「撰取不捨」の用例がある。

- ⑤ 「無量寿仏に、八万四千の相有ます。一一の相に、各八万四千の随形好有ます。一一の好に、復八万四千の光明有ます。一一の光明、遍く十方世界を照らしたまふ、念仏の衆生をば撰取して捨てたまはず。」(眞聖全一・五七頁)
- ⑥ 「謹て化身土を顕さば仏は『無量寿仏觀經』の説の如し、眞身觀仏是なり。土は『觀經』浄土是なり。」(定本二六九頁)
- ⑦ これを寺川俊昭師は『歎異抄の思想的解明』において、『觀無量寿經』に由来するこの撰取不捨という言葉さえ、親鸞は前掲の『末燈鈔』の思索では、『大無量寿經』には、撰取不捨の利益にさだまるものを正定聚となづけ」と、いわば『大無量寿經』の思想的立場で再解釈して、『大無量寿經』の願成就の思想に立って、救済を意味する撰取を正定聚・不退と了解し直し、自家薬籠中のものとして語って行く。

〔寺川俊昭選集〕二・三九三頁

と述べられている。

- ⑧ 『真聖全』一・九四九頁参照
- ⑨ 吉水時代の学の成果と考えられる『観経集註』がそれを示すであろう。『定親全』第七卷解説を参照。
- ⑩ この一段の記述は、延塚知道師の『求道とは何か』に大きな教示を頂いた。
- ⑪ 註④参照
- ⑫ 三一問答はその結びに「三心即一心一心即金剛真心之義 答竟可知（『定本』一四〇頁）」と述べられるように、本願成就の一心が金剛心であることをその結論とする。
- ⑬ 『定本』一一七頁
- ⑭ 『定本』一二〇頁
- ⑮ 『定本』一二〇頁
- ⑯ 『定本』一二四頁
- ⑰ 『定本』一二七頁
- ⑱ 『尊号真像銘文』に依れば「他力の至心信樂のこゝろをもて安樂浄土に生まれむとおもへと也（『定親全』三・和文篇・七四頁）」である。
- ⑲ 「一念多念文意」「回向は、本願の名号をもて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。」（『定親全』三・和文篇・一二七頁）
- ⑳ 『尊号真像銘文』・『定親全』三・和文篇・八六頁
- ㉑ ここは「必ず須く決定真実心中に回向し願じて得生の想を作すべし（『浄土宗全書』二・五九頁）」と行者の側からの立場で読まれる文であるが、親鸞はこれを如来の側から読み替えているのである。
- ㉒ 『定親全』三・和文篇・一二八頁参照
- ㉓ この一段の記述は、水島見一師の「旭川別院同朋研修会公開講演会講演録第四巻―浄土をひらく―」に大きな示唆を頂いた。
- ㉔ 『尊号真像銘文』・『定親全』三・和文篇・七五頁
- ㉕ 「信卷」・『定本』一〇三頁
- ㉖ 例えば法然は『選択集』で「言一切別解別行異学異見等者、是指聖道門解行学見也。（『真聖全』一・九六七頁）」と述べ、これを聖道門であるとされている。
- ㉗ 寺川俊昭師は『歎異抄の思想的解明』で、この現生十種の益こそ「歎異抄」の撰取不捨の利益だとして、詳細に論じておられる。『寺川俊昭選集』二・三九四―四〇五頁参照。
- ㉘ 「信卷」真仏弟子釈所引『安樂集』・『定本』一四七頁  
これは異訳『無量寿如来会』に依る。（『定本』一四四頁）
- ㉙ 『真聖全』一・三三三頁参照
- ㉚ 『定本』三〇七頁
- ㉛ 『定本』七頁
- ㉜ 「行卷」「正信偈」偈前の文所引『論註』『知恩報徳』の文・『定本』八五頁
- ㉝ この「大悲弘普化」の文を「化身土卷」に引用する際、親鸞は「弘字智昇法師儀儀文也（『定本』三〇七頁）」と註記する。現行の『往生礼讚』では「大悲伝普化（『真聖全』一・六六一頁）」とあり、親鸞は「一伝」ではなく「弘」であると意識的に読んでいたのである。そこに、自

らが「大悲を伝える」というのでなく、「大悲、弘く」と大悲そのものの弘がりを親鸞は仰いでいるのである。

③⑤ 『歎異抄』第六章・『定親全』四・言行篇一・九頁

③⑥ この讚は、法然が『選択集』撰取章（『真聖全』一・九五七頁）や「法然聖人御說法事」（『西方指南抄』上末「定親全」五・六五頁）等で「撰取不捨」について「本願の義」を示す讚として意味深く引用するものである。

③⑦ 「現生護念増上縁」の文の中、「総不論照撰余雜業行者」の一文だけが、「化身土巻」の『大経』と『観経』の三心一異の問答中に引用される（『定本』二八五頁）。また、その問答の結句が「仏心光明不照撰余雜業行者也、仮令之誓願良有由哉（『定本』二九二頁）」と、この文を使って閉じられるのである。この事は注目すべき事柄であるが、「化身土巻」の展開と密接に関わる為、今は論じない。

③⑧ 『真聖全』一・五二一―二頁。この三縁積は、『選択集』撰取章に引用され（『真聖全』一・九五六頁）、また特にその中の親縁・近縁は『選択集』二行章において正雜二行の得失を判ずる際に親疎対・近遠対の証文として引用される（『真聖全』一・九三七頁）等、法然教学において大きな位置を占めるものである。しかし親鸞は、わずかに増上縁が「善導和讃」（『定親全』二・和讃篇・一一二頁）に依用される以外、三縁積について言及することはない。親鸞は意識的に三縁積、特に親縁・近縁を避けているのである。

③⑨ 親鸞は「現生護念増上縁」を引用する際、「但有專念阿弥陀仏衆生」から引き始める。ただ『観念法門』原文では、

この文の直前に「如第九真身觀説云（中略）身相等光一一遍照十方世界」等と、「身光」についての文がある（中略筆者）『真聖全』一・六二八頁）。しかし、親鸞がこの「身光」についての文を引用する事は、親鸞の著作と言うべきものの中には一切ない。それだけでなく、「心光」という表現は多数見られるが、「身光」という表現自体がほぼ見られないのである。それは本論で述べたように、「心光」の語が正に本願の智慧のはたらきを象徴する語である事、そして「身光」の語が本願の成就と無関係に存在する仏を想起させる事によるのだと考える。また、本論は対目的な面を述べたのであるが、対他的な事柄として『摧邪輪』「摧邪輪莊嚴記」での法然の撰取不捨了解に対する明恵の批判も考えられる。これについては、井上善幸氏「親鸞の「撰取心光」理解について」（『真宗学』第一一一・一一二合併号）を参照のこと。

④④ 『観経』開説の意義については、拙論「横出の菩提心―「化身土巻」開頭への視座―」（『真宗研究』第五十五輯）参照。